

「業火の試練 エイブラハム・リンカンとアメリカ奴隷制」

エリック・フォナー(著)、森本奈理(訳)

白水社 2013年7月10日刊

本書は第16代アメリカ合衆国大統領エイブラハム・リンカンが奴隷解放をいかに考え、政策として実施していったかを記録したものがある。本書はピューリッツァー賞、バンクcroft賞、リンカン賞というアメリカで出版された歴史書に与えられる主要な賞を総なめにした名著である。

著者はアメリカ歴史学界の重鎮であり、奴隷解放に至る経過を淡々と、しかもさまざまな角度から実に詳細に描くことで、歴史の複雑さを表現し、読み応えのある著作になっている。現代政治を考える上でも示唆に富んだ論点が多く含む。

第一に、リンカンは成長することを止めなかった人物だということである。最大の偉業である奴隷解放への道のりも、初めから確固たる信念と政策があったわけではなく、時間を通して政治家としての立場を微妙に変えながら、その目的を達成した。

第二に、リンカンが奴隷制度の廃止という国を二分し、実際に南北戦争に発展していった大問題に勇気をもって取り組み、かつ国家分裂を回避し、むしろ国家としての一体感を醸成していった手腕への評価である。事後的に見れば成功物語だが、著者は結論ありきの書き方はせずに、大失敗の可能性も含めて、リンカンが危機の時にどれだけ踏みとどまり、軌道修正を行ったかを書いている。政治家としてはむしろこの軌道修正能力が重要だということであろう。

第三に、リンカンが奴隷解放宣言にとどまらず、国会議員の3分の2の賛成をもって憲法修正第13条を可決させ、奴隷解放を憲法上でも保証することで、この問題に終止符を打ったことである。時間をかけて、議会内での説得工作を続けて可決に持ち込んだ執念には敬服する他ない。解放された黒人からみれば救世主と映ったことであろう。国家を二分するような最重要課題はこうやって、合意を得るべきであるという見本のような事例である。

第四に、リンカンが重要な問題に対して、後世に残るゲティスバーグ演説などを通して、国民を説得してきたということも忘れてはならない。リンカンの演説は言葉の力をあらためて考えさせてくれる。